

樂美術館

[茶道&芸術]

広く信じられている話によると、1500 年代の後半のいずれかの時点で、茶道家の千利休（1522-1591）は長次郎という陶芸家（1589 年没）に、簡素なものや不完全なものに美を見出すという利休の侘の美学に沿った茶碗を、公の茶会で使うために作るよう依頼したとのこと
です。

長次郎は、赤と黒の釉薬を塗った、つつましい手作りの茶碗をいくつも作りました。長次郎はその技術を近親者に伝え、それが樂焼の始まりとなりました。長次郎の子孫は 16 代にわたって、今日までこの伝統を生かし続けています。

樂焼師は決して、次世代に直接教えを施すことはありません。そうではなく、それぞれの次世代は受け継いだ茶碗やその他の作品を研究し、それらを模範にして新たな作品を作ります。そうすることで、禅の影響を受けた樂焼の本質を受け継ぎながら、自分自身の様式を確立していくのです。

樂美術館では、樂家の工房の職人芸と伝統の展示と普及を専門的に行っています。現在樂家を率いるのは、16 代樂吉左衛門（1981 年生まれ）です。1976 年に工房の隣に建てられた樂美術館には、茶碗、道具、文書、それに長次郎の時代から樂家で代々受け継がれたものなど、1,300 点もの収蔵品が収められています。

樂美術館は、季節に 1 回、毎年 4 回の展示を行います。説明やパネルは日本語版に加えて英語版もあり、参加者が実際の樂焼の茶碗を手にとったり樂焼の茶碗でお茶を飲む特別プログラムも実施されます。